

よろこびあふれる心

ウォッチマン・ニー

The Joyful Heart

Watchman Nee

7月2日

ただし、ほんとうにあなたがたがキリストに聞いているのならばです【エペソ 4:21】

7月1日

このとき、ヨブは立ち上がり、その上着を引き裂き、頭をそり、地にひれ伏して礼拝した【ヨブ 1:20】

まことに不思議なかたちで、神は、ヨブが持てるすべてを奪われることをお許しになりました。『彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいない、』神ご自身がヨブのことを証言して、こう言われていたのに、それでも許されたのです。そこに、4人の使者がほとんど同時に現れ、たった一日のうちに、彼が持っていたすべてのものが取り去られたことを告げました。ヨブの反応はどのようなものだったでしょう？神の前にひれ伏して、拝んだのです。

真の礼拝があるところには、不満はありません。ここにいるのは、神に完全に服従する男で、何をされようとも、ためらうことなく神の前に、ひれ伏すことができました。自分や他の兄弟姉妹が、あまりに理不尽な扱いを受けていると思えても、神に、それがなぜなのかと、問いつめることをやめましょう。神に対し、説明を求めることはせず、ただ単純に、主の思いは私たちの思いより、はるかに高いところにあること、そして主のなさることはすべて、完璧であることを受け入れましょう。

July 1

Then Job arose, and rent his robe, and shaved his head, and fell down upon the ground, and worshipped. - Job 1:20

In the mystery of His ways God permitted Job to be deprived of everything he possessed, though He Himself had just borne witness of him that there was “none like him in the earth, a perfect and an upright man.” Four messengers had arrived almost simultaneously with the news that within the compass of one short day, he had been stripped of everything he possessed. How did he react? He fell down before God and worshipped.

Where there is true worship, there are no complaints. Here was a man so utterly subject to God that he could unhesitatingly bow to all His ways. Let us cease questioning God’s dealings with us, and with our brothers and sisters, however baffling they may be. Let us cease asking Him for explanations and in simplicity accept that His thoughts are higher than our thoughts and all His ways are perfect.

救われた後、私は、五旬節の日のペテロの説教に不満を感じることをよくありました。大切なことが、何ひとつ明瞭に説明されていないと、感じたのです。その中に救いの計画のことがまったく触れられていなかったからです。ペテロが、『救い主』と言う呼び名さえ使っていないとは、なんと奇妙なことではありませんか！しかし、その説教の結果はどうだったでしょう？その場にいた人々は、心を刺され、『私たちはどうしたらよいのでしょうか』と叫んだと伝えられています。また、コルネリオに対して、ペテロはキリストとは誰だったのか、それだけを話し、主の死の意味については、何も語りませんでした。それでも、聖霊は彼らすべての上に降ったのです。

福音を伝える現代の説教の最大の弱点は、人に救いの計画を理解させ、また、主の方へと向かわせるために、罪の恐怖とその結果を教えていることです。私たちはどこで間違ったのでしょうか？間違いの原因はまさにここにあり、その故に聴衆が主を知ることができないのです。聞き手は、『罪』や『救い』にのみ目を注ぎますが、本当に必要なことは主イエス様を見上げ、主にふれることです。

July 2

If so be that ye heard him. - Ephesians 4:21

After I was saved, I used to feel dissatisfied with Peter’s sermon on the Day of Pentecost. It did not, I thought, make things clear at all, for there is nothing in it about the plan of salvation. How strange that Peter did not even use the title “Savior”! But nevertheless, what was the result? The people, we are told, were pricked in their hearts and cried, “What shall we do?” Again, to Cornelius Peter only spoke about who Christ was; he gave no explanation of the meaning of His death. Yet even so, the Holy Spirit fell upon them all.

The great weakness of present preaching of the gospel is that we try to make people understand the plan of salvation, or we try to drive people to the Lord through fear of sin and its consequences. Wherein have we failed? I am sure that it is in this, that our hearers do not see him. They only see “sin” or “salvation,” whereas their need is to see the Lord Jesus and touch Him.

7月3日

彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった【マタイ 27:34】

十字架の刑を科せられた人は、長い苦しみの死を味わうことになります。十字架に付けられた者の苦痛を和らげるために、苦みを混ぜたぶどう酒か、酢を与えることは許されていました。罰を受けている者にとって、少しでも痛みを和らげてもらえることは、ありがたいはずですが、しかし、私たちの主はそうではありませんでした。主は、唇に寄せられたそのぶどう酒をなめただけで、飲もうとされませんでした。主の中には、痛みを鎮めようと泣き叫ぶ気持ちはなかったのです。

私たちなら、十字架を背負う覚悟があると声に出してみても、やはり、苦みを混ぜたぶどう酒は飲みたくなるのではないのでしょうか！痛みを和らげる何かを求めている限りは、本当の意味でキリストの十字架を背負っていません。この真実に目を覚ますことができますように。試練にうんざりしている者は、ぶどう酒を飲み下して痛みを和らげようとしています。人は同情されるのが好きです！尽きることなく、慰めを欲しがり、どこへ行っても同情を求め、誰もいたわってくれないと、阻害されたように感じます。そんな時、自分は十字架について何も理解していないことが露見してしまいます。十字架とは、神の御心を喜んで受けいれることも意味しているのです。

July 3

They gave him wine to drink mingled with gall:
and when he had tasted it, he would not drink. -
Matthew 27:34

To condemn a man to the cross was to condemn him to an agonizing death, but it was permitted to alleviate the sufferings of the crucified by offering a drink of gall mixed with wine or vinegar. No doubt the slightest alleviation of his pain was welcomed by the condemned. Our Lord, however, was an exception. When He tasted the drink that was lifted to His lips, He refused it. There was nothing in Him that cried out for the easing of His pain.

We profess to bear the cross, but how eager we are to drink that wine mingled with gall! May we awake to the truth that if we are yearning for an anodyne, we are not truly bearing the cross of Christ. Only those who find their trials irksome need a soothing draught. How we love sympathy! We have an insatiable craving to be comforted, seeking it from every possible source and feeling aggrieved if it is not offered to us. Unwittingly we reveal that we know little of His cross, which involves a joyful acceptance of the will of God.

7月4日

キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためです【エペソ 5:26】

教会に対する神のもっとも崇高な目的が、この手紙に啓示されています。その際立った特徴として、教会は、罪人が救われることでなく、彼らがキリストに選ばれた時に始まるとされています。エペソ書では、他にはない事実が、明らかにされています。ここに私たちは、教会、世界の基の置かれる前からキリストのうちに選ばれた教会を見ます。それは、主から起こされたもので、永遠に主のご栄光を現すように定められています。

しかし、同時に、エペソ書では人の罪、人の墮落が事実であることも、はっきりと示されています。キリストに属する私たちひとりひとりには、真に主のものである新しい霊を授けられていますが、それと同時に、キリストにはない多くのものが、私たちの中に、多く残されているのです。そのため、この節では、キリストの行いによって、私たちが清められることが語られています。主は、私たちが回復し、神の意図された姿へと、完全に換えられることを願っておられます。すなわち、神の計画は、それ以上清める必要すらないところへ私たちを連れて行くことであり、これは間違いのない事実ですが、今の私たちは、まだ清められる必要があるのです。

July 4

That he might sanctify it, having cleansed it by the washing of water with the word. - Ephesians 5:26

God's highest revelation of the Church is seen in this letter. Its outstanding feature is that it starts, not with sinners being saved, but with their having been chosen in Christ. Thus in Ephesians something transcendent is unveiled to us. We see the Church, chosen in Christ before the foundation of the world, formed out from Him, and destined forever to manifest His glory.

At the same time, however, Ephesians shows us that man's sin and man's fall are facts. Every one of us who belongs to Christ possesses a new spirit which is truly of Him, but alongside this there are still in us many things which are not of Christ. That is why we are told in this verse about Christ's activities to cleanse us. He wants to restore us till we completely match with God's eternal design. It is true, therefore, that God plans to bring us to the place where cleansing is no longer necessary, but today we still need to be cleansed.

7月5日

あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。
御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか【ガラテヤ 3:3】

パウロが、ローマ人への手紙の中で明示したのは、罪人の救いは、神の恵みによってなされることです。ガラテヤ書の中では、信者は、同じように恵みにより頼むことで、キリスト者としての生活を続けていることが示されています。私たちは、自分の救いのために、何かをしたわけではなく、神に何かをあげたこともありません。そして、これが神とともに歩く人生の基盤であるべきです。

神はまず、私たちを新しい場所に置き、新たな人生を始めることを助けてくれます。深い穴の底に落ちたとしたら、自分では外に出ることはできず、神が救い上げて、岩の上に乗せてくださるのを待つしかありません。神は、私をキリストの中に置くことで、これを実行されます。こうして、主は私の過去のすべての問題を解決されたのです。しかし、神はそれ以上のことをしてくださいました。キリストのいのちを私の内側に置かれることで、現在、そして、これから来る時に必要なものすべてを備えてくださったのです。ですから、霊的な成長は、試練をくぐり抜けて手にするものではなく、神の恵みを真心から見つめ、キリストの満たしを受け続けることから得られるものです。

July 5

Are ye so foolish? having begun in the Spirit, are ye now perfected in the flesh? - Galatians 3:3

Paul makes it clear in his letter to the Romans that the sinner depends on the grace of God for his salvation. In Galatians he shows us that the believer depends equally upon that grace for his continuance in the Christian life. We never did anything, or gave God anything, for our salvation, and this must be the basis of our walk with Him.

God begins by giving us a new position so that we have a new start. If I am down at the bottom of a pit, then I continue there with no way of getting out of it until God lifts me out and puts me upon a rock. He does this by placing me in Christ. By doing so He has settled all my past. But He has gone further than that. By placing the life of Christ within me, He has given me all I need for the present and for the entire future. Spiritual progress, then, is not by an agonizing striving to attain, but by looking trustfully to God's grace and continuing to receive of Christ's fullness.

7月6日

主を愛する者たちよ。悪を憎め【詩篇 97:10】

罪からの解放と言う問題を議論するときは、第一に、解放される者の条件、資格について触れないわけにいけません。神による解放はすべての人に用意されているとはいえ、誰もが実際に解放されるわけではありません。使徒パウロは、ローマ書7章でこのことを、自分で気づかないうちに示しています。そこに記された経験を通して、彼は最終的に解放されることになりました。それはパウロが、何を憎み、また何を求めるべきかを理解するという条件を満たしたからです。

ここには、彼がいかにして解放されるかにとどまらず、解放される前に、心の中でどう感じているかということも書かれています。『私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっている(ローマ書7:15)。』したがって、今日、何よりも先に訊くべき問いは、このようなものです、今、自分がしたいと思うことをしていますか、それとも、自分が憎むことを行なっていますか？この使徒は、罪にある人生を生きることを拒み、そこから抜け出すことを決意しました。そのような生き方を憎んだからこそ、また、逃げ口を探し出す決意を持っていたからこそ、解放を見出すことができたのです。

July 6

O ye that love Jehovah, hate evil. - Psalm 97:10

Before ever we discuss the subject of deliverance from sin, we must first mention a condition or qualification of those who are to be delivered. Even though God's deliverance is prepared for all, not all are delivered. The Apostle Paul indicates this almost unconsciously in Romans 7. In the experience described there, he finally becomes emancipated because he has fulfilled the condition of knowing what to hate as well as what to desire.

We read not only how he gets released, but also how he feels in his heart before he is released: "For not what I would, that do I practice; but what I hate, that I do" (Romans 7:15). Hence the first and foremost question today is: Do you love what you are doing now, or do you hate it? The apostle was so unwilling to live a life in sin that he was determined to get out of it. It was due to his hatred of it and his determination to find an escape that he found deliverance.

7月7日

私はその陰にすわりたいと切に望みました。その実

は私の口に甘いのです【雅歌 2:3】

本物の信者にとって、キリストの愛はそれだけで十分なものです。キリスト者は、そこに休息、守り、満足を見出します。この歌い手は、初めは愛する人の後ろについて走ることを語りましたが、今は休息を与えられた喜びを、声高らかに歌っています。樹のように、その影は彼女を覆い、その実は彼女に深い満たしを与えてくれます。

正午の暑さが体を貫くことはなく、キリストに隠れ場を求める者が、熱で疲弊させられることもありません。救い主の愛の安らぎである常緑樹の下で休むとき、人は、『切に望んでいたもの』を見出し、霊が驚くほど高ぶることに気づきました。この世の焼け付く熱から守られていただけでなく、内面から新たにされていたのです。あたりには他にも樹があって、いつも緑に茂っていたのに、実を結びませんでした。キリストはいのちの木で、他の木とは違います。主は日中の燃える熱を遮ってください、それと同時に、私たちの内なる必要を満たすだけの実をつけてくれます。

July 7

I sat down under his shadow with great delight,
and his fruit was sweet to my taste. - Song of
Songs 2:3

To the true believer, the love of Christ is all-sufficient. In it the Christian finds rest, protection, and satisfaction. The singer of this song has told of running after her beloved, but now she exclaims with joy that she has come to rest. Like a tree, his shadow is over her and his fruit gives her deep satisfaction.

No noonday heat can penetrate, no fever exhaust the one who flees to Christ for shelter. As he comes to rest beneath the ever green coolness of the Savior's love, he finds only "great delight" and a marvelous uplift of spirit. Moreover, he is not only protected from the scorching heat of circumstances, he is inwardly refreshed. There are some trees which, though always green, do not bear fruit; but Christ is the unique tree of life. At one and the same time He affords shade from the burning heat of the day and satisfying fruit for our inward sustenance.

7月8日

幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えて…救いを受けさせることができます【2テモテ 3:15】

子供たちを主の下に導くために、『家の中の祭壇』を置く効果があります。創世記の中では、幕屋と祭壇は密接

な関係がありました。言葉を換えれば、礼拝と家族は結びついていたのです。今日、家族で祈り、聖書を読むことの両方が不可欠なのはここから来ています。両親は、子供をまっすぐに導くために、子供たちのために祈るだけでなく、子供たちと共に祈り、また、子供の一人一人に、自分のために祈ることを教えなくてはなりません。

家族の集まりでは、子供たちのことを第一に考えてください。家族の礼拝は、あまりに長すぎたり、深すぎると失敗に終わります。何かを教える時は、子供の目線で行うべきであって、親に合わせてはいけません。親は、教会で礼拝し、学ぶことができるからです。子供たちとの祈りは、彼らに理解できる言葉と考えで行うべきです。子供たちをキリストに惹きつけ、主と自然に語らうようにしてあげなさい。いつでも、自分が神に大切にされていると感じるようにしてあげてください。

July 8

From a babe thou hast known the sacred writings
which are able to make thee wise unto salvation.
- 2 Timothy 3:15

One way of leading children to the Lord is an effective "family altar." In Genesis, the tent and the altar were closely associated. In other words, worship and the family are connected. This is why family prayer and Bible reading together are so indispensable today. Parents must lead their children in simplicity, not just praying for them but with them, and also teaching each child how to pray for himself.

In a family gathering, the children must be the first consideration. Family worship can be a failure because it is too long or too profound. The exposition must be on the children's level, not that of the parents, who can worship and be taught in the church. Prayer with them must be in words and ideas they can understand. We must try to attract the children to Christ and let their response to Him be spontaneous. Always let them feel they matter to God.

7月9日

ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございます。
私はふろしきに包んでしまっておきました【ルカ
19:20】

ふろしきやハンカチは、働いてかいた汗を拭くためのものです。誰であっても、そのふろしきで持てる才能を覆い隠すような使い方をすべきではありません。5種類、10種類と言う多くの才能を持った人が、前に進み出て奉仕しようと、それによって、教会が広く成長していくことにはなりません。成長するという教会の責務は、ひとつの才

能を持った者に重くかかっています。ひとつの才能を持った者が用いられ、成長するなら、教会の全てがうまくゆきます。しかし、その才能が埋もれてしまったら、教会全体が沈み込んでしまいます。

希望はただひとつです。すなわち、ひとつひとつの教会が重きをおくべきは、特別な資格を持った誰かの存在ではなく、とりたてて長所も持たず、人にかえりみられることもない者たちです。彼らに伝えてあげてください。神は、彼らのご自身のために真摯に働いて流した汗を拭うことをよしとされること、そして、その汗がなければ働きをなすことはできないことを。

July 9

Behold, here is thy pound, which I kept laid up in a napkin. - Luke 19:20

Napkins or handkerchiefs should be used for wiping off the sweat of toil. No one's napkin should be misapplied to the wrapping up of his talent. Whether a church can grow prevailingly does not depend on whether or not those who receive five talents, or ten, come forth and serve. The weight of responsibility for growth rests on those with one talent. If the one-talented are employed and growing, all in the church will be well; but if they bury their talent, then the whole church stagnates.

Thus we have only one hope; namely, that the weight of emphasis in every local church should be placed, not on those who are especially qualified, but on those less-gifted ones whom men despise. You have to tell them that God approves of their wiping off the perspiration of honest work for Him, and that without it that work will not be done.

7月10日

キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです【コロサイ 3:11】

キリストの御体とは、ギリシヤ人でもユダヤ人でもなく、また、未開人、スクテヤ人でもありません。国籍の区別のないひとりの新しい人です。次の話が、それを良くあらわしています。第一次世界大戦の後、イギリスからキリスト者の兄弟たちが、ドイツで開かれた会議に参加しました。ドイツ人の兄弟の一人が、訪問者を紹介するために立ち上がり、こう言ったそうです、『もう戦争は終わり、イギリス人の兄弟たちが訪ねてきてくれました。心から、皆さんを暖かく迎えたいと思います。』

紹介されたなかの一人が立ち上がり、こう返答しました、『私たちはイギリス人の兄弟ではなく、イギリスから来た兄弟です。』なんとすばらしい言葉ではありませんか！

思い出してみてください。エルサレムの教会でさえ、この間違いが起こりそうになったことがあるのです。ギリシヤ語を使う人たちと、ヘブル語を使う人たちとの間に論争が起こった時のことです(使徒6章)。アンテオケで、弟子たちがキリスト者と呼ばれるようになったのは良いことです。教会の中では国籍の区別も、人種の違いもなく、すべてであるキリストが、すべてのうちにおられるだけなのです。この他には、何もいらぬのではないのでしょうか！

July 10

But Christ is all, and in all. - Colossians 3:11

The Body of Christ is not Jew and Greek, barbarian and Scythian, but one new man, without national distinctions. The following story is a good illustration. After the First World War, some Christian brothers from England went to Germany to attend a conference. One of the brothers in Germany rose to introduce the visitors, saying, "Now that the war is over, we have some English brothers visiting us, to whom we extend our warmest welcome."

Among those introduced, one stood up and replied, "We are not English brothers, but brothers from England." How well spoken were those words! For remember, even in the church in Jerusalem this mistake began to be made when a dispute arose between the Hebrews and the Grecians (Acts 6). It is good that at Antioch the disciples came to be called Christians, for in the Church there is neither national distinction nor racial difference, but only Christ who is all and in all. How satisfactory this is!

7月11日

さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐ向けられた【ルカ 9:51】

目的地に向かうキリストを横道にそらすことなど、誰にもできるはずはなかったのですが、それでも、旅の途中、主はあちらこちらで、多くの街や村に足を止めて、教えられました。時に主は、旅の道すじから外れることがありましたし、そうしなければ、途中で備えられた機会を生かすことができなかつたからです。確かに、主が、『天に上げられて』御父に会う時間は近づいていたのですが、そこに達するまでの短い時間も、休むことなく目的を持って行動されたのです。

もし、私たちが早く『天に上げられ』て主に会うことを望むなら、それまでの時間を、無意味に過ごし、その日を待つだけで過ぎ去ることがないようにしましょう。質問させてください。主が戻られることは、ただどこかで教わった

教義ですか、それとも、それが現実になる日を、前を向いて待っていますか？その間、何をしていますか？十字架の道を日々、主とともに歩んでいますか？途上で出会った人たちに、主の救いと言う福音を伝えていますか？そして、自分が証し人であるだけでなく、他の人たちの働きに引き込んでいますか？目的の場所ははっきりしています。しかし、そこに至る道すじには、機会が至るところに転がっています。私たちは、ただ、手の内に与えられるすべての働きに熱心に取り組みればよいのです。

July 11

And it came to pass, when the days were well-nigh come that he should be received up, he steadfastly set his face to go to Jerusalem. - Luke 9:51

Nothing could sidetrack Christ from the goal; yet on His road thither He visited many cities and villages and taught in them. Without deviating from His course, He nevertheless bought up every opportunity by the way. Yes, though the hour approached when He “should be received up” to the Father, the short space of time between was filled with purposeful activity.

If we hope soon to be “received up” to meet Him, let us not spend the in-between time idly waiting for that day. Let me ask you: is this hope of His return just a part of our creed, or are we positively waiting for its realization? And what are we doing in the meantime? Are we daily walking with Him in the way of the cross? Are we telling those we encounter by the way the Good News of His salvation? And are we alone in our witness, or are we drawing others to labor with us? The goal is clear, but the road between is strewn with opportunities, if only we will set ourselves to do diligently all that comes to our hand.

7月12日

これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい【マルコ 9:7】

私たちには神の書が必要であり、また、神の預言者が必要です。神は、モーセやエリヤ、そしてこの二人が示すものを打ち捨てて顧みるな、とは言われません。しかし、この山上の変貌と言う出来事から学ぶべきは、この二人のどちらであっても、私たちの心のうちで神の生ける声が占める場所に置き換えることは絶対にできないということです。

御国の明るい面では、キリストの絶対的な権威が認められます。一方、負の面として、主以外のすべての権威を徹底的に排除することがあります。これを行うためには、

神の御心を直接、理解することが必要です。その中には、神から与えられた助けがすべて、含まれていますが、それだけでは終わりません。御国では聞かすべき声はひとつしかありません。誰のことばを通して語られても、それは同じ声なのです。キリスト者であるからと言って、人や書物の助けを必要としないことは決してありません。しかし、御国でのあり方は、愛された御子が私に個人的にかつ直接、語りかけ、私も、個人的、かつ、直接、主の御声を聞くというものです。

July 12

This is my beloved Son: hear ye him. - Mark 9:7

We need God's Book and we need God's prophets. He would not have us discard either Moses or Elijah and what they represent. But the lesson of this incident on the Mount of Transfiguration is surely that neither of these can take the place of the living voice of God to our hearts.

The kingdom involves on the positive side a recognition of the absolute authority of Christ, and on the negative side a repudiation of every authority but His as final. It demands a firsthand intelligence of the will of God that embraces other God-given aids, but does not end with them. In the kingdom there is only one Voice to be heard, through whatever medium it speaks. Christianity is not independent of men and books—far from it. But the way of the kingdom is that the beloved Son speaks to me personally and directly, and that personally and directly I hear Him.

7月13日

ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった【創世記 19:26】

信者が、外向きには世と離れ、持てるものをあとに置いてきたのに、心の内側では、キリストのために捨てたはずのものに固執し続けることはよくあります。過ぎて行った時間に、あこがれの眼差しを向けてしまうのは、簡単に昔の自分に戻って、捨て去ったものを取り戻そうとする気持ちがあることを証明しています。

イエス様が、弟子たちに強い警告を与え、ロトの妻のことを忘れないように語ったのはこのためです。ロトの妻は、大きな危機の中にあっても、前から持っていたものに心を奪われたままでした。ソドムの方へ一歩引き返したとは、書かれていません。彼女は、ただ振り返っただけです。しかし、一瞬だけでも、後ろに目を向けたことは、大きな何かを象徴しているのではないのでしょうか！自分にいつも聞き続けるべきは、心がどこに向けられているのかということなのです。

July 13

But his wife looked back from behind him, and she became a pillar of salt. - Genesis 19:26

It is possible for a believer outwardly to forsake the world, leaving everything behind, and yet inwardly to cling to those very elements which he has forsaken for Christ's sake. Just to cast back longing glances is proof enough of how easy it would be to go back and repossess what had once been given up.

That is why Jesus gave His strong admonition to His disciples that they should remember Lot's wife. She was one who did not forget her former possessions even in a time of great peril. We are not told that she was guilty of retracing a single step toward Sodom. All that she did was to look back. How revealing, though, was that backward glance! The question at issue is always, on what is my heart fixed?

7月14日

しかし、私にあるものを上げよう。ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい【使徒 3:6】

この足のきかない男が、ペテロとヨハネに求めた施しの願いを、私たちが突き付けられたら、どうしていたでしょうか？その問題を祈り会で取り上げ、その困窮しきった魂のために祈ることをお互いに頼んだのではないのでしょうか。使徒たちがしたことは違っていました。彼らはその男に直接、語りかけました。そこで、投げかけられたのは証しの言葉でした。

祈りには二つの要素があると考えてみてもよいでしょう。確かに、祈りは神に向けられたものです。しかし、時には、そこにある山に向かって、『動け！』という祈りもあります。霊に導かれた証し人には、目の前の困難に対処するために、時に驚くほど強い力が与えられます。それが、使徒行伝にはっきり示されています。

July 14

What I have, that I give thee. In the name of Jesus Christ of Nazareth, walk. - Acts 3:6

What would we have done if confronted with the kind of need which faced Peter and John as this lame man made his appeal? Probably we would have brought the matter to a prayer meeting and urged one another to pray for this needy soul. The apostles did not do this. The words which they spoke were directed to the man himself—they were the words of testimony.

We may perhaps suggest that there are two elements in prayer. Prayer is certainly toward God, but it is sometimes also a matter of saying to this mountain, "Be thou removed!" There is tremendous power in Spirit-given witness addressed directly to the situation, as the book of the Acts so clearly shows.

7月15日

このキリストにあつて、あなたがたともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです【エペソ 2:22】

かつて、キリストを信じるある姉妹のことを教えていただきました。その女性は、物静かで、優しく、『きわめて霊的』な人であるとのことでした。私は教えてくれた方に、『誰に対して霊的なのですか』と質問しました。答えは、『そうですね、彼女ほど高い声で歌える歌い手ですと、自分と一緒に歌える人を見つけるのは大変なことでしょう』と言う、想像していなかったものでした。

この女性はあまりに霊的なために、誰もこの人の霊的な相手になれないのです。この姉妹は、人に見てもらうには良いかもしれませんが、教会を立てあげる上では役に立ちません。神の教会で必要とされるキリスト者は、ある人を後ろにおいて、他の信者を自分の前に置き、他の誰かを自分の上、また、さらに別の者を下に置きながら、それでも霊的であるような人です。神はただ、高価な石を人に見せることを計画されたのではなく、家が必要なのです。

July 15

In whom ye also are builded together for a habitation of God in the Spirit. - Ephesians 2:22

I was once told of a sister in Christ who was so quiet and gentle that she was "highly spiritual." "Who is she spiritual with?" I asked my informant. The revealing reply was, "Well, singers who can sing such high notes as she can, find few who can sing with them."

Alas, she was so spiritual that no one could be her spiritual companion! Such a sister is alright for display purposes, but she is no use for church building. The kind of Christian needed in the Church of God is one who can have another placed behind her and another in front, another over her and yet another under her, and still be spiritual. God did not just plan for a display of precious stones; He wanted a house.

7月16日

ホレブから、セイル山を経てカデシュ・バルネアに至るのには十一日かかる【申命記 1:2】

カデシュ・バルネは、カナンへの最も外側の入り口でした。シナイ山を登って11日後には、イスラエルの子もカナンに入ることができたはずですが、彼らには信仰がなかったため、38年の長きにわたって、荒れ野をさすらいことになり、その後ようやく、彼らの子孫がその地に入りました。何とも、回り道をしたものです！

私たちの霊的な旅でも、どれだけの日日を無駄に費やしたでしょうか？誰もが長い時間を無意味に過ごしてきたのではないのでしょうか。数日間で解けたかも知れないの問題が、何年もそのまま残ることがよくあります。イスラエルの民のように、私たちも荒れ野をふらふらとさまよい、神の時だけでなく、自分の時間も無駄にしています。主の声に心を傾けましょう。その声は、最後まで固くくじけない自信を、今こそ抱くようにと、強く呼びかけています。主の道はまっすぐに伸びています。私たちには主の安息に入ることが約束されています。

July 16

It is eleven days' journey from Horeb by the way of mount Seir unto Kadesh-barnea. - Deuteronomy 1:2

Kadesh-barnea was at the very entry to the land of Canaan itself. Thus only eleven days after leaving Mount Sinai, the children of Israel would have entered Canaan. Yet because of their unbelief, they wandered in the wilderness for thirty-eight long years before their descendants finally entered the land. What a circuit they had traveled!

How many days have we wasted in our spiritual journey? All too many, I fear. Problems that might have been solved in a few days remain outstanding, often for years. Like the Israelites, we circle around in the wilderness, wasting God's time and our own. Instead let us heed His voice exhorting us to hold fast the beginning of our confidence firm to the end. His ways are straightforward. He has a promised rest for us to enter.

7月17日

民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた【出エジプト記 32:6】

神は、イスラエルをご自分の民として選び、彼らをご自身

の祭司の王国とすることを計画されました。しかし、後に彼らは、自分で選び、自分で刻んだ偶像を拝むようになりました。今や、アロンが金でかたどった神の像を見て喜んでいますが、モーセが、彼らを導いた神は、姿が見えないという不利な点があり、今やそのモーセ自身さえどこにもいません。彼らには、金でできた子牛の像を拝むほうがずっと簡単だったのです。よく知っている姿をしているし、全体を刻んだ像が目の前に立っていたのですから。

彼らは、他の神を持ち、他のものを拝むようになりました。神は、彼らにご自身の祭司となることを望まれたのに、自分から進んで鑄物の子牛を拝む祭司となってしまったのです。人間が、何かにより頼る事をやめようと言う態度を取るとき、常に、自分で作った神を好むようになるものです。自分の目に見え、また、自分で作り出せる何かを礼拝することをよしとするのです。真実に溢れた、目に見えない創造主の権威にひれ伏すことはずっと難しいことです。

July 17

The people sat down to eat and to drink, and rose up to play. - Exodus 32:6

When God chose Israel to be his people, his plan was that they should be a kingdom of priests to himself. Now, however, they were worshipping an idol of their own choice and design. Their happiness lay in the fact that they could see this god which Aaron had cast of molten gold. The God whom Moses had led them to know had the great disadvantage of being invisible, and now even Moses himself was not to be found. It was very much easier for them to worship the golden calf standing there, familiar in form, in full view before them.

They now had another god and another worship. Whereas God had intended them to be His priests, they had turned themselves into priests of the calf. Man's attitude of independence always leads him to prefer a god of his own making. He likes to worship what he can see and manipulate. It is much harder to submit to the authority of his faithful, unseen Creator.

7月18日

召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました【ローマ 8:30】

この書にあるように、主の元に呼び寄せられ、義とされた人々はすでに栄光を受けています。目標は達成されているのです。教会は既に、栄光に入りました。究極の真実は、いつでも神の前にあります。神は教会をどこまでも純粹で、どこまでも完璧なものと見られます。

霊的な成長は、天国にある神の究極の標準を見だし、それを現実の力として生きると言うような、どこか遠くにある抽象的な目標を目指して進むものとは違います。霊的な進歩は、自分が本当は何者であるかを見出すことから始まります。自分になりたいと望むものになろうとすることではありません。神の永遠の真実の基へと、近づいていくにつれ、キリスト者の生活の中にある真実が、少しずつ現れてくるはずで

July 18

Whom he called, them he also justified: and whom he justified, them he also glorified. - Romans 8:30

According to this Scripture, all who have been called and justified have already been glorified. The goal is attained. The Church has already come to glory. The ultimate reality is before God all the time. He sees the Church utterly pure, utterly perfect.

Spiritual growth is not so much a question of pressing through to some far-off and abstract goal, as of seeing God's ultimate standard in heaven and living in the power of that reality. Spiritual progress comes by finding out what you really are, not by trying to be what you hope to become. As we move forward to the basis of God's eternal facts, we shall see, here and now, the progressive manifestation of those facts in Christian lives.

7月19日

第七日目に、なされていたすべてのわざを休まれた【創世記 2:2】

休息は働いた後に取るものです。そして、仕事を終えて、すべてに満足できたときにはじめて、本物の休息があります。神は、初めの6日間は休まずに働き、7日目に休みました。天地創造の最初の6日間で、光、大気、草、香草、そして、木ができました。そこには、太陽、月、星々が造られました。また、魚、鳥、家畜、地をはうものが生まれました。そして、最後に人ができ、そこで神はすべてのわざを休まりました。神は人を造られたところで、初めて満足されたのです。

『見よ。それは非常によかった(創世記 1:31)。』この、『見よ』という言葉の使い方に注意しましょう。私たちも何か、買った、作ったりしたものから心から満足した時、それをいろいろな角度から眺めてはよろこび、いつまでも見つめています。最後の仕上げとして人間を造られた時、すべての面で完璧だったので、神は心から満足されました。それ以上に、できることがひとつだけありました。罪の贖いによって、私たちもご自身とともに休息できることを、

キリストを通じて約束してくださいました。

July 19

He rested on the seventh day from all His work which He had made. - Genesis 2:2

Rest comes after work. Moreover, work must be completed to entire satisfaction before there can be true rest. God did not rest in the first six days, but He rested on the seventh. During the six days of creation, there were light, air, grass, herbs, and trees; there were the sun, the moon, and the stars; there were fish, birds, cattle, and creeping things. Finally there was man, and God rested from all His work. When God gained a man, he was satisfied.

"Behold, it was very good" (Genesis 1:31). Note the use of the word "behold." When we have purchased or produced an object with which we are particularly satisfied, we turn it round with pleasure and look over it long and well. God's work of creation with man as its summit was so perfected that it brought Him satisfaction. Could he have done more? He did. Through redemption He has brought us through Christ the promise of sharing His rest.

7月20日

私は…キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦みの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです【コロサイ 1:24】

贖い主としてのキリストの働きは完成されましたが、主の苦悩は満たされないまま残っています。キリストは人類の救済のために働かれましたが、主のなされたことを知らない人もおおぜいいます。主ご自身は、同じ時代に生きた中でも、直接語り合った人にだけ、福音を伝えられました。今度は、私たちが世界に出て行って、キリストが成し遂げられたことを語らなければなりません。

使徒パウロは、異邦人に対して福音を伝える働きについて書き、その中で、今も消えずに残っているキリストの苦悩を満たすことを語っています。彼が経験的に理解したことは、私たちのあがないのためにイエスが支払った代価の他に、まだ払わなければならないものが残っています。それは、福音を広める時の苦難、苦しみ、そして、恥辱です。しかし、このために福音を広めることを躊躇してはいけません。

July 20

I . . . fill up on my part that which is lacking of the afflictions of Christ in my flesh for his body's sake,

which is the church. - Colossians 1:24

The work of Christ as Redeemer is complete, but His afflictions remain to be filled up. Christ has wrought salvation for mankind, yet not all men know what He has done. He Himself only preached the Good News to those of His generation in direct contact with Him. For this reason, we must go and tell the world what Christ has accomplished.

The Apostle Paul is writing of his labors with the gospel among the Gentiles when he speaks of filling up what remains of the afflictions of Christ. Experience had shown him that to the cost paid by Jesus for our redemption there was still a price to be added: the tribulations, distresses, and shame involved in the spreading of the Good News. But this must never deter us from spreading it.

7月21日

ですから、神のみこころに従ってなお苦しみに会っている人々は、善を行なうにあたって、真実であられる創造者に自分のたましいをお任せ下さい【1ペテロ4:19】

人間が創造されたのは、神の必要を満たすためでした。神が求めたのは自分と同じ姿をした人類と交わりを持つことで、それは、ご自分のためでした。それとは対照的に、贖いは、人間が神を拒絶したことで失われたものの救済であり、回復でした。贖いによって、神が定められた、創造の永遠の目的がはじめて回復し、達成できたのです。

私たちキリスト者は、贖いの中で神からいただいた贈り物にばかり、目が行き、創造における主の目的を見失ってしまいました。贖いは私たち自身とその幸福のために行われたもので、どうしても、そこにこだわってしまいます。天地創造は神とそこ目的のためのもので、それが、何よりも重要とされる理由です。こうして、贖いによって、私たちが神の御業の始まりへと連れ戻されます。そこでは、自分の必要を満たすだけでなく、神の善き喜びをかなえる仕事に、身を捧げることになります。私たちは、真実である創造主のために喜んで祈り、働き、また苦しみを受けるべきではないでしょうか？

July 21

Wherefore let them also that suffer according to the will of God commit their souls in well-doing unto a faithful Creator - 1 Peter 4:19

The creation of man was to meet a need of God: His desire was for communion with a race of men like Himself and for Himself. Redemption, by contrast, is remedial, restoring to God what had been lost by

man's rejection of him. Redemption makes possible the recovery and fulfillment of His original and eternal purpose in creation.

We Christians have so stressed God's gift to us in redemption that we have lost sight of His purpose in creation. Redemption is related to us and our well being, that is why we stress it. Creation is related to God and His purpose; that is why it is of such great importance. Thus redemption brings us back to God's beginning, there to be occupied, not just with the satisfying of our needs, but with the fulfilling of God's good pleasure. Should we not be willing to pray and labor and suffer for our faithful Creator?

7月22日

いのちの恵みをもとに受け継ぐ者として…【1ペテロ3:7】

神は、夫と妻がともにご自分に仕えることを喜ばれます。神はアクラとプリスキラが二人で奉仕されたことを祝福し、また、ペテロとその妻、ユダとその妻にも、同じようにされたことは疑いありません。

キリスト者の結婚には三つの基本的な目的があります。そのうち、最初のふたつは、誰の結婚に対しても言えることです。すなわち、お互いに助けあうこと、そして、家族としての生活を立ち上げることです。しかし、3番目はキリスト者の夫婦にのみ当てはまり、それは、彼らが神の恵みを共に受けることです。ここに、キリスト者の結婚が神にとっても大切であることがはっきりと示されています。彼らは、共に歩む人生と、互いへの思いやりという恵みを、神ご自身が運んでくださる道を開いたのです。結婚は神によって定められたもので、人間ではありません。結婚の目的はここにあるのではないのでしょうか？

July 22

Being also joint-heirs of the graces of life. - 1 Peter 3:7

God delights in having a husband and wife serve Him together. He blessed the joint ministry of Aquila and Priscilla, as He doubtless did that of Peter and his wife, and Jude and his.

There are three basic reasons for Christian marriage. The first two can be common to all marriages; namely, for the mutual help given and received, and for the institution of family life. The third, however, is peculiar to a Christian couple, for they can receive God's grace together. This clearly shows the importance to God of such marriages. They provide for God a special avenue of bestowal of His grace upon the shared life and upon humanity. Marriage

was instituted by God, not by man. Was it for this reason?

7月23日

あなたの謙遜は、私を大きくされます【2サムエル 22:36】

神が指導者を選ぶ時、それが人間の考える理想的な指導者の姿とまったく違っていることはよくあります。預言者サムエルでさえ、王サウルの名声と権力に目がくもり、後継者に油を注ぐために呼ばれた時、王の紋様に最もよく見合う者はエッサイの長子であると、信じ込んでしまったのです。しかし、エリアブも他の6人の兄弟も、神には受け入れられませんでした。皆、外ではなく、内にある人を見続けていたからです。ダビデは、神がみずから選んだ男でした。

他の者にはなく、ダビデだけが持っていたものとは何でしょう？とりわけ、大切だったのは神により頼む心でした。立派な心を持っていたということではありません。実際、後の生涯でダビデは、その心が罪にまみれていたと告白せざるを得ませんでした。それでも、このとき、神の前にへりくだって、教えを乞う気持ちを示した彼の心はサウルとまったく違っていたのです。神のみ国の祝福は、心の貧しいもののために備えられています。

July 23

Thy gentleness hath made me great. - 2 Samuel 22:36

It frequently happens that God's choice of a leader is quite different from man's ideas of what a leader should be. Even the prophet Samuel had been so influenced by King Saul's stature and strength that when called to anoint a successor, he was ready to believe that Jesse's eldest son matched best the kingly pattern. But neither Eliab nor any of his six brothers was acceptable to God, who all the time looked not at the outward but the inward man. David, He affirmed, was His chosen man.

What did David possess that was lacking in the others? Above all he possessed a heart of dependence on God. It was not a perfect heart. In fact, later in life David had to confess that it was a sinful heart. Nevertheless, it was quite different from that of Saul in this respect, that he displayed a humble willingness to learn. The blessing of God's kingdom is reserved for the poor in spirit.

7月24日

ペテロが割礼を受けた者への福音をゆだねられているように、私が割礼を受けない者への福音をゆだねられていることを理解してくれました【ガラテヤ 2:7】

パウロは主の僕ではあっても、ペテロとは違うところもありました。パウロは福音を伝えていないと思う人はいないでしょう。もちろん、パウロは伝えました。そうしなかったなら、ペテロが始めた仕事を断ち切り、ペテロが取った陣地を捨ててしまうことになったでしょう。この二人の男の働きには根本的な相反するところがあったとか、また、神に仕える者の働きと言っても一致しない部分があつて当然などと思うことは誤りです。パウロも、ガラテヤ人への手紙の中で記しているように、考え方の違いは、土地柄や人種から来るものに過ぎず、根本部分では、彼らも互いに支えあって働いていました。それは示し合わせてそうしたのではなく、等しく神に尽くし、神に認められたためです。

ペテロの最後の手紙の終わりの一行を読むとよいでしょう。そこでは、愛する兄弟パウロに与えられた知恵に触れています。そうするには、恵みが必要だったのかもしれない。私たちも、こんなふうに互いを称えるときは、時に恵みが必要なのではないでしょうか？

July 24

I had been intrusted with the gospel of the uncircumcision, even as Peter with the gospel of the circumcision. - Galatians 2:7

Paul was a servant of the Lord, but he was different from Peter. No one would suggest that Paul did not preach the gospel. Of course he did. To have done otherwise would have been to repudiate the pioneer work of Peter and throw away the ground gained by him. Do not let us make the mistake of thinking there was some basic conflict between the ministries of these two men, or that the ministries of God's servants should ever be in conflict. Paul makes it clear, in writing to the Galatians, that such differences as there were were related to geography and race, and that in essence their tasks were complementary, not only by mutual consent, but in their value to and attestation by God.

It is very good to read the closing verses of Peter's last epistle, in which he refers to "the wisdom" given to his beloved brother Paul. He may have needed grace to do that. Do we not sometimes need grace to honor one another like that?

7月25日

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません【2コリント 6:14】

この警告は、結婚に対してのみ向けられたものと思う人が多いようです。結婚も確かに含まれていますが、それよりはるかに多くのことに関連しています。ここで、語られているのは、信者と不信者の間のあらゆる種類の友情と人間関係です。この節と次の節に続く5個の質問を読めば、はっきりします。その中で、お互いに相容れることのない5つの対比が示されています。

このくびきが、どれだけつり合わないものか、考えてみてください。あなたは神の人、彼には信仰はありません。あなたは信じていますが、彼は信じていません。あなたは神を知っていますが、彼には知識すらありません。あなたは必要なことのすべてにおいて神に信頼できるのに対して、彼には信じられるものが何もなく、自分しか見るものがないのです。あなたは自分が持てるものすべて、また、自分の計画を神のみ手にゆだねますが、その人はすべてを自分の手の内に止めておこうと決めています。神を信じることは、あなたにとって、息をするのと同じくらい自然なことですが、彼の人生には完全に無縁の物事です。教えてください。信者と不信者の間にどれだけの共通点があるでしょう？

July 25

Be not unequally yoked with unbelievers. - 2 Corinthians 6:14

Many people seem to think this warning refers exclusively to marriage. I believe that it includes marriage, but that there is far more to it than that. It comprises all kinds of friendship and association between believers and unbelievers. To see this clearly we have only to read the five questions which follow in this and the next verse. They set forth five contrasts that are totally incompatible.

Consider how unequal is that yoke. You are a man of God, but he has no faith. You believe, but he does not believe. You know God, but he has no such knowledge. Whereas you can trust God for every need, he has no one to trust, so must look to himself. You would place everything you possess or plan into God's hands, but he is determined to keep all things in his own hand. Believing God is as natural as breathing to you, but is something totally foreign to him. Tell me: What portion has a believer with an unbeliever?

7月26日

あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあな

たの父に祈りなさい【マタイ 6:6】

この節に出てくる『自分の奥まった部屋』は比喩的な表現です。『会堂』や『通りの四つ角』が公けの、人目に触れる場所を指しているように、『奥まった部屋』は隠れた場所のたとえです。しかし、覚えておいてください。文字通りの街角、本当の街道にいても、霊的な奥まった部屋を見つけることはできるのです。喧騒に満ちた往来でも、騒がしい部屋の中でも、隠れて祈ることはできます。なぜでしょう？あなたが神と個人的に交わることのできる場所、また、祈っていると人に知られることなく主と話せる環境なら、どこでも、奥まった部屋だからです。『戸をしめて』とは、世の思いをすべて断ち切って、神と二人だけになることを意味します。

そのような祈りこそが、信仰の実現です。そのために必要なのは、何も見えず、何も聞こえなくとも、その場において、あなたの祈りを気にかけてくださる父に向かって祈ることです。神は見ているだけではありません。あなたに報いてくださるのです。信じられますか？

July 26

Enter into thine inner chamber, and having shut thy door, pray to thy Father who is in secret. - Matthew 6:6

Here the phrase "thine inner chamber" is figurative. Just as "synagogues" and "street corners" represent public and exposed places, so "inner chamber" means a hidden place. But let me remind you that you may find a spiritual inner chamber on literal street corners and in literal synagogues. You can pray in secret, that is, on a noisy thoroughfare or in a crowded room. Why? Because an inner chamber is any place at all where you commune with God privately, and any circumstance where you can speak with him without a conscious display of your prayer. "Having shut thy door" means shutting out the world and shutting yourself in with God.

Such prayer is an exercise of faith. It requires that although your senses register nothing, you are praying to a Father who is really attentive, taking account of your prayer. And He is not only observing: He is even going to recompense you. Can you believe this?

7月27日

その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります【1コリント 13:12】

キリストの裁きの座の前に来る時、私たちはそこに立って、神の調べを受けるだけでなく、神からあることを明ら

かにしていただくことになります。それは、今は完全に間違っているように見えても、確かに主の御心である何かです。その時、私たちはこう告白することになるでしょう。かつて、自分が正しいと思ったことも、今では本当に間違っていたことがはっきり分かりました、と。また、ある場合については、主が私たちは正しかったが、その時は、主ご自身も正しかったと、と認めてくれるでしょう。

主に対して、気持ちを荒げないことは、最も大切な訓練であり、そこには大きな祝福が生まれます。神が約束された通りのことをしてくれないと、思ってしまうことがあるものです。なぜか、主がその御言葉どおりの方に見えなくなります。実は、神はそのみ言葉より、はるかに良いのです。今こそ、主に信頼しなくてはなりません。そうすれば、すべてを理解できます。

July 27

Then shall I know fully even as also I was fully known. - 1 Corinthians 13:12

When we come before the judgment seat of Christ we shall stand there, not only to be assessed by God, but that He may explain certain things to us—things which seem all wrong now, but which are His perfect will. In many cases we will have to confess that where we had thought we were right, it is clear now that we were quite wrong. In other cases, however, the Lord will assure us that in fact we were right, but that He was right also.

Not to be offended with the Lord is the highest form of discipline and carries with it a special blessing. There are times when it really seems to us that God is not acting according to His promise. Somehow He seems less than His Word. In fact, He is always better than His Word. We must trust Him now: we shall know it all then.

7月28日

父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです【コロサイ3:21】

新約聖書には、子供より、親に対して多くのことが命じられています。親であることは、何よりも大変な仕事だからかもしれません。そこには、神が与える感性が求められます。権威を用いるときは、抑制が必要で、過度に用いると、かたくなな抵抗を呼び起こします。この節が警告しているように、親の気持ちが鈍いと、子どもをおこらせて、気落ちさせてしまいます。

すべての面で、あなたは自分の子供よりも強いのです。子供を抑圧するために、威圧的な態度を取ったり、体罰を与えることもできます。そうして息子を追い立てれば、

家から出ていく日を心待ちにするようになるでしょう。その日が来たら、抑えつけていたものをすべてかなぐり捨て、自由だけを求めるようになります。自分にこう聞いてみてください。困り果てた息子が、『立って、父のところに行こう』と、助けを求めたのはどんな家だったでしょう。

July 28

Fathers, provoke not your children, that they be not discouraged. - Colossians 3:21

There is more instruction in the New Testament for parents than for children. This may be because the occupation of being a parent is harder than any other. It requires a God-given sensitivity. Authority must be used with restraint, because its excessive use may stiffen resistance. This verse warns us that insensitive parents can easily provoke their children to the point of discouragement.

In every way you are stronger than your child. You may subdue him by an overbearing will or simply by your physical strength. If you goad him to such an extent, then he will just wait for the day of liberation. When that day comes, he will throw off all restraint and claim freedom in everything. Ask yourselves, therefore, what kind of home it was that led the needy son to resolve, "I will arise and go to my father."

7月29日

神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです【黙示録7:17】

新しいエルサレムは本当に素晴らしいところです。純金の大通りと、真珠でできた十二の門があるからではなく、そこには主が臨在され、もはや涙はなくなるからです。誰にも、いずれは死んで、キリストの元で憩う日がきますが、私たちは、ただ死を待っているのではなく、もう誰も泣かなくてよい日を待っているのです。

新しいエルサレムはすぐにきます。その瞬間、この涙であふれた世界は消え去ります。その日、主がよみがえりの体をくださいます。おそらく、その体は今、私たちが持っているのと似ていて、個々の部分は同じようなものでしょう。しかし、それは造りかえられた体です。そして、その造りかえられた体には、取り去られたものが一つあります。目にはもう涙がないのです。主が私たちの痛みをその身に負われたので、これから来る日には、私たちは苦しむことはありません。永遠に涙を流さなくてよいと言う、神の希望に感謝しましょう。

July 29

God shall wipe away every tear from their eyes. - Revelation 7:17

I delight greatly in the New Jerusalem, not because it has a street of pure gold and twelve gates of pearl, but because there will be the presence of the Lord and the absence of any more tears. We may die and rest in Christ, yet we are not just waiting for death, but for the coming day when the world shall weep no more.

The New Jerusalem is coming very soon, and this tearful world will pass instantly away. On that day the Lord will give us a resurrection body. I think that that body will be similar to the one we have today, possessing all the different members it has now. But it will be a transformed body. And in this transformed body one thing will be missing—tears in the eyes. The Lord has borne our pain so that we may not suffer again in the future. Thank God for the prospect of no more tears forever.

7月30日

あなたがたのうちに病気の人がありますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、…祈ってもらいなさい。…また、もしその人が罪を犯していたなら、その罪は赦されます【ヤコブ 5:14,15】

これは不思議な種類の許しです。聖書のほかの箇所でも、長老たちがあなたのために祈れば許されるなどと書いてあったでしょうか？どこにも書いてありません。罪を犯したなら、それを神の前に告白して初めて、神の許しを直接いただくことができます。なぜヤコブは、許しを理解するために、教会の長老たちを招いて、祈ってもらいなさいなどと勧めているのでしょうか？

聖書の中には、神による統治とも呼ぶべきものが確かにあって、その第一の原理は、あなたは自分で撒いたものを刈り入れるということです。ヤコブがこれを書いているのは、病に苦しんでいる人のためのようですが、それは神の御手がその人を統治しているためです。誰にもはつきりとは分からないからこそ、その人と長老たちが会い、共に告白し、御体の交わりの中で祈るのです。こうして、神の手が離れ、交わりが戻ります。

July 30

Is any among you sick? Let him call for the elders of the church; and let them pray over him . . . And if he have committed sins, it shall be forgiven him. - James 5:14, 15

This seems a peculiar kind of forgiveness. Can you find elsewhere in the Bible that if the elders pray for you, you will be forgiven? No, if you sin you must confess to God and you will receive His forgiveness direct. Why does James advise you to call for the elders of the church to pray so that you can know forgiveness?

In the Scriptures it is clear that there is what can be called the government of God, the chief principle of which is that you reap what you have sown. It seems that James writes for the man who may be suffering sickness because of God's governmental hand upon him. No one knows clearly, so he and the elders meet and confess and pray together in the fellowship of the Body. The hand of God is lifted then, and fellowship is restored.

7月31日

主イエス・キリストを着なさい【ローマ 13:14】

誰かの家を訪ねるときは、いつも着ていく服のことを考えます。同じように、誰でも神に近づこうとすると、義を身に付けねばならないことを知っており、それは、義がなければ神には会えないからです。このため、義は、キリスト者の生活の土台となるものです。

許しは風呂に入るようなものですが、義とは礼服を着るようなものです。人の前で服を着るのは、よく見せるためです。同じく、神は私たちに義の衣を着せてくださり、御前に生きることを許してくださいます。神の言葉の中で、言われているのは次のどちらでしょう？神は、私たちに主イエス様の義の衣を着せてくれるか、それとも、義の衣として主イエス様を着せてくれるのでしょうか？とどのつまり、書かれているのは、主イエス様ご自身を着なさいと言うことです。私たちが、主を着るのです。そうしていれば、私たちはいつでも、神の前を大胆に歩むことができます。

July 31

Put ye on the Lord Jesus Christ. - Romans 13:14

When we go to visit people, we always think of our dress. Now in the same way, when anyone thinks of approaching God, he knows he must be clothed with righteousness because without it he cannot meet God. For this reason, righteousness is a fundamental issue in Christian living.

Forgiveness is like taking a bath, whereas righteousness is like wearing a robe. Among men we are clothed so that we may appear before them. So, too, God clothes us with righteousness so that we may live before Him. Does God's Word say that He

will clothe us with the righteous robe of the Lord Jesus, or that He will clothe us with the Lord Jesus as our righteous robe? In point of fact, what we do read is that we are to be clothed with the Lord Jesus Himself. We are to put Him on. Thus clad, we can walk before God with boldness at all times.